

新体操競技における団体演技の分析

—— こん棒の演技構成 ——

小 林 由 美 子

I. 研 究 目 的

新体操世界選手権大会が開催されて今年で27年になる。第1回大会（1973年）の参加国が10ヶ国だったのに対し、第14回大会（1989年）では35ヶ国となりその普及、発展はめざましい。参加国の増加と共に、新体操の運動技術も大きく発達しているのではないだろうか。そこで、本研究では現在、国際大会で上位を占めているブルガリア、ソ連に日本を加えたこの3ヶ国の第8回世界選手権大会（1977年、スイス）と第14回世界選手権大会（1989年、ユーゴスラビア）におけるこん棒の団体演技がどのように構成されていたかを比較分析し、演技構成の変遷を見ると共にこれからの新体操はどうあるべきかを考えようとするものである。

II. 研 究 方 法

第8回世界選手権大会と第14回世界選手権大会のビデオフィルムを参考に下記の項目について分析、考察する。

- (1) 演技時間とフォーメーション（隊型変化）について
- (2) 技術内容（徒手要素と手具要素）について
- (3) 手具交換について

また、参考までに各大会の各国の得点を表1に示し、さらに各大会で使用された1973年版ルール（以下旧ルール）と1989年版ルール（以下新ルール）の中で団体演技について本研究に関連のある項目を取り上げて表2に示した。

表1 第8回、第14回世界選手権大会の得点

国 名		ブルガリア				ソ 連				日 本			
大会	回	構成	実施	合計	得点	構成	実施	合計	得点	構成	実施	合計	得点
1977年	1	9.65	9.55	19.20	38.300 (2位)	9.60	9.45	19.05	38.375 (1位)	9.45	8.95	18.40	37.475 (4位)
	2	9.60	9.50	19.10		9.85	9.65	19.05		9.60	9.25	18.85	
	3	最終試技実施のみ				9.45	9.30			9.20	9.45		
1989年	1	9.90	9.60	19.50	39.100 (1位)	9.85	9.20	19.05	38.650 (2位)	9.70	9.20	18.90	37.050 (7位)
	2	10.00	9.60	19.60		10.00	9.60	19.60		9.70	8.45	18.15	

なお、得点の計算方法は次の通りである。

1977年

$$\frac{\text{第1試技 (構成・実施)} + \text{第2試技 (構成・実施)}}{2} + \frac{\text{第1試技 (構成)} + \text{第2試技 (構成)}}{2} + \frac{\text{最終試技 (実施A)} + \text{最終試技 (実施B)}}{2} = \text{最終得点}$$

1989年

$$\text{第1試技 (構成・実施)} + \text{第2試技 (構成・実施)} = \text{最終得点 (種目別)}$$

表 2 ルール改訂表

項 目	旧ルール (1973年版)	新ルール (1989年版)
演 技 時 間	2分30秒から3分	2分から2分30秒
フ ォ ー メ ー シ ョ ン	6 回 以 上	
手 具 交 換 数	4 回 以 上	4回以上そのうち2回は高級難度
難 度 数	中級難度6回, 高級難度2回	中級難度4回, 高級難度4回
左 手 で の 演 技	左 右 均 等	輪・ボール・リボンは高級難度1回
伴 奏 音 楽	単一の楽器, 一人の演奏者	数個の楽器, オーケストラ可

Ⅲ. 結果と考察

表 3 各国の演技内容

国 名		ブルガリア		ソ 連		日 本	
		旧	新	旧	新	旧	新
項 目							
演 技 時 間		2分53秒	2分19秒	2分46秒	2分27秒	2分56秒	2分21秒
フ ォ ー メ ー シ ョ ン		23	18	19	20	14	17
手 具 交 換 数		12	6	4	4	5	6
徒 手 要 素	ジ ャ ン プ	6	5	10	2	6	7
	ピ ボ ッ ト	1	2	4	1	0	0
	バ ラ ン ス	0	3	1	3	0	3
	屈	4	0	2	1	1	2
	ス テ ッ プ	2	6	9	0	3	2
	準アクロバット	1	2	3	1	0	2
	蛇 動	0	0	0	0	3	0
手 具 要 素	小 円	14	8	14	8	7	7
	風 車	8	6	7	4	4	4
	小 さ な 放 し	5	6	9	3	2	1
	投 げ	2	3	2	4	2	3
	打 ち	1	5	2	2	4	5
	こ ろ が し	2	0	1	1	0	3
	振 り	2	0	7	0	13	10

各国の各大会（以下、第8回世界選手権大会を旧、第14回世界選手権大会を新とする）における演技時間、フォーメーション、技術内容（徒手要素、手具要素）、手具交換について表3に示した。技術内容の徒手要素はジャンプ、ピボット、バランス、屈、ステップ、準アクロバットに蛇動を加え、手具要素は小円、風車、小さな放し、投げ（手具交換以外）、打ち、ころがし及びスライドに振りの運動を加え分類した。

1. 演技時間とフォーメーションについて

新ルールにおいて、団体の演技時間は2分から2分30秒となり旧ルールより30秒短くなった。それは団体競技が2種目によって競われることになり（1987年より）選手の負担を少なくしようとするものと考えられる。演技時間の長短は演技の善し悪しや得点に直接関係するものではないが、フォーメーションの数やその移動の方法から演技の幾つかの特徴を捉えることが出来る。ブルガリアの旧はフォーメーションの数が多く小走りによる移動がほとんどで、移動及び運動の羅列しか捉えられない。その点、新では演技の始めと終わりにリズムカルなステップ、中間では歩やジャンプなどの移動があり緩急の変化が見られる。ソ連の旧は、ジャンプによる移動が8回、ステップによる移動が5回で、運動を伴ってフォーメーションを行っている。新では小走りやジャンプなどの大きな移動が少なくほとんどが歩によって行われている為、演技の盛り上がりや緩急の変化は感じられない。日本は新旧共にジャンプやステップ及び走による移動が旧では8回、新では11回と多く行われており、他にはない躍動感を与え演技の盛り上がりも感じさせる。旧は身体運動を充分に見せようとしている為かフォーメーションが14回と少なく、1つのフォーメーションに長い時間留まっている傾向にある。

2. 技術内容について

徒手要素では、新ルールにおいて「こん棒の基礎要素はバランスである」と加わり、各国共に新ではバランスを3回明確に取り入れている。ブルガリアの新は、ブルガリア民謡のステップと思われるものを多く取り入れ、それを特徴としているが、徒手要素として屈の運動が全くなく、柔軟の要素が少ない。その点、旧ではジャンプが6回、屈が4回あり移動が多い中でも徒手要素を充分に行っている。しかし、運動の一つ一つに間がなく、常に動いているのはこん棒で、こん棒を操作するための運動のみに片寄っている。ジャンプが10回入っているソ連の旧はステップも9回と多く躍動感のある演技である。また、ピボットを4回取り入れクラシックバレエを思わせるような演技でもある。それとは対照的に新は、ジャンプなどの徒手要素が少なくシンクロナイズドスイミングのような脚の動きを3ヶ所に入れ、それを特徴としていると思われるが体操の要素として判断しにくい。日本は新旧共にピボットがなく、これは日本がピボットについて研究不足であることを物語っており、今後の大きな課題である。また、ジャンプにおいては新旧共に多く取り入れられピボットとは逆に日本人の得意とされるものと思われる。他の国には全く見られない蛇動の運動が3回あることは日本の旧の特徴である。

手具要素では、小円、風車がブルガリアやソ連の旧に多く行われているのに比べ、日本の旧及び全ての国の新では少なかった。日本の旧では、こん棒を腕の延長として振りの運動を多く行っていること、また新では各国共にこん棒の真ん中を持ち手首を使って回す運動が多く行わ

れていることから小円、風車が少なくなっていると思われる。交換以外の投げ受けや小さな放しは日本は新旧共に3～4回で少なく、他は7～11回行われている。特にソ連の新は個人の投げが多く、投げの間に徒手を行ったり変化に富んだ受け方をするなど、新ルールにおけるリスク（ボーナス点に加点され、危険を伴うものをいう。例えば、手具が一時的に視野から外れることが条件）に属するものを行っている。また、一人が6本のこん棒を投げるという今までにない投げ方も取り入れている。徒手要素の蛇動の取り入れ方に類似しているものとして、こん棒の振りがあり、日本の旧では13回新では10回と多く取り入れている。ブルガリア、ソ連の旧で2～7回あったものの、新では全く入っていない。振りの運動は、こん棒の特徴的な要素であり欠けてはならないものである。

3. 手具交換について

手具交換はフォーメーションと共に団体演技の特徴であり必要不可欠なものである。その手具交換については、フォーメーションを図1～図37に表わし、交換の方法について簡単に示した。

交換の回数は新旧ルール共に4回以上であるが、ブルガリアの旧では12回と多くの交換を取り入れている。その交換の難易度は旧ルールにおいて表記されていない為明確ではないが、新ルールに照らしあわせてみると中級難度（Medium Difficulties, 以下DMとする）は図1, 2, 5, 12, 高級難度（Superior Difficulties, 以下DSとする）は図8, 10, 11である。交換の方法は、投げとスライド、投げと手渡し、大小の投げ、2本投げなど多種多様であり、組合せは2名で行うものばかりではなく、3名または6名で行っている。図10は一方がジャンプと共に1本を投げ前転して相手が投げた1本を受ける交換で、これはリスクに属するものである。旧に対して新は交換が6回で少なくなっているが、他の国よりも多い。DSは図15の6m以上の距離で2本のこん棒を連続に投げる交換、図17の2本投げ、図18の一方が手と脚を使って連続投げ一方が2本投げの交換である。DMは図14のステップと共に行うもの、図16の一系列の交換であり全ての交換に独創性があり工夫されている。また、1名が手渡しで2本を受け4本のこん棒をお手玉のように操作しながら2名に投げる運動や、2名が腕とこん棒で円をつくり1名がジャンプと共にこん棒を蹴るなど高度な技術を必要とする組合せも行っている。

ソ連は新旧共に4回の交換で、ルール上の最低限の回数である。旧では、DSは図19と図21であるがいずれも高さが欠けていると思われる。DMとされる図20は小さい投げと床転がしであり図22はジャンプを伴って投げているが小走りをして受けるなどこれらの交換は、難易度の低いものである。新の交換は図23の2本投げの大交換や、図24では高さのある1本投げをしてその間に足を振り上げてターンをして受けるといったリスクに属する交換、図25と図26ではジャンプと共に2本投げをするなど全体に高さのあるダイナミックな交換で高級難度とされるものが多い。しかし、2人組で行う交換のみで組合せの多様性に欠けている。

日本の旧は5回の交換を取り入れている。図27の6人の小さい投げ、図28の背面での大交換、図29の4人組と2人組による交換、図30の小さい投げ、図31の両手での2本投げという交換で全て投げによるものである。DSとしては図28と図31があげられる。図28の大交換は背面で投げて背面で受ける高さのあるダイナミックな交換で他には見られないものである。

ブルガリア (旧)

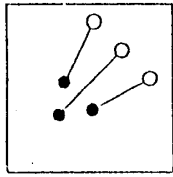


図 1

- 1 本スライド
- 1 本投げ

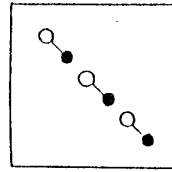


図 2

- 2 本床上転がし
- 2 本小さい投げ

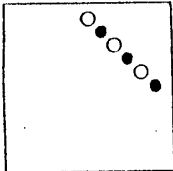


図 3

- 1 本うかす
- 1 本投げ

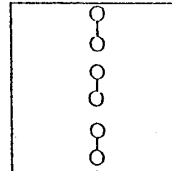


図 4

- 1 本小さい投げ

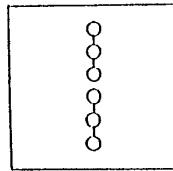


図 5

- 1 本小さい投げ

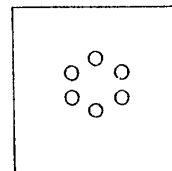


図 6

- 1 本投げ

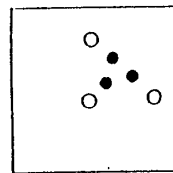


図 7

- 2 本手渡し
- 2 本投げ

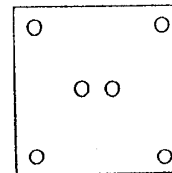


図 8

- 1 本大きい投げ

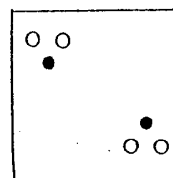


図 9

- 2 本投げ
- 手渡し

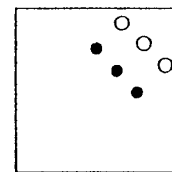


図 10

- ジャンプと共に 1 本投げ
前転
- 1 本投げ

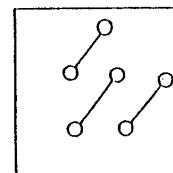


図 11

- 2 本投げ

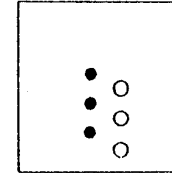


図 12

- 1 本立ち上がりながら投
げ
- 1 本小さい投げ

ブルガリア (新)

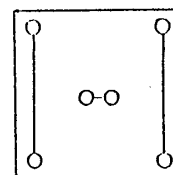


図 13

- ステップと共に手渡し

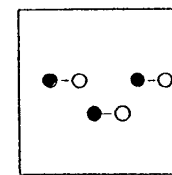


図 14

- 1 本を真上に投げ相手か
ら 1 本受け 2 本投げ
- 1 本投げ

ブルガリア (新) つづき

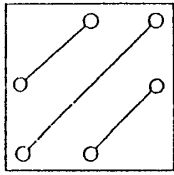


図 15

右手に 2 本ずらして持ち連続して大きい投げ

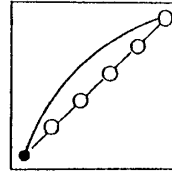


図 16

● 大きい投げと
○ 小さい投げ

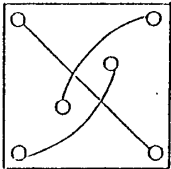


図 17

2 本大きい投げ

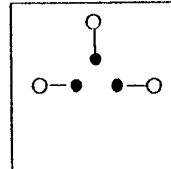


図 18

● 1 本投げのち 1 本足投げ
○ 2 本投げ

ソ 連 (旧)

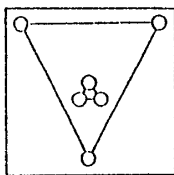


図 19

1 本大きい投げ

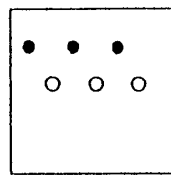


図 20

● 小さい投げ
○ 2 本床上転がし

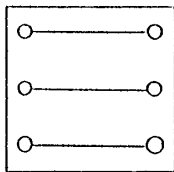


図 21

1 本大きい投げ

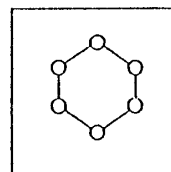


図 22

ジャンプと共に 1 本投げ

ソ 連 (新)

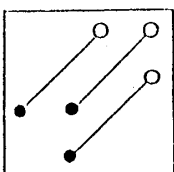


図 23

● 2 本後方大きい投げ
○ 2 本前方大きい投げ

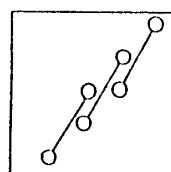


図 24

1 本大きい投げ

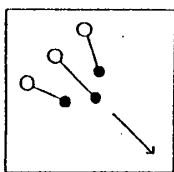


図 25

● ジャンプと共に 2 本投げ
○ 1 本床上スライド

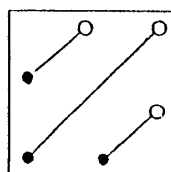


図 26

● ジャンプと共に 2 本投げ
○ ジャンプと共に 1 本投げ

日 本 (旧)

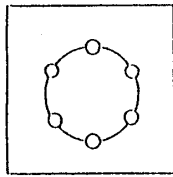


図 27

1 本小さい投げ

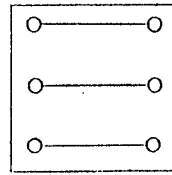


図 28

1 本大きい投げ

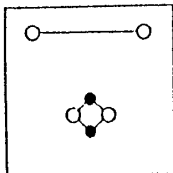


図 29

● 2 本投げ
○ 1 本投げ

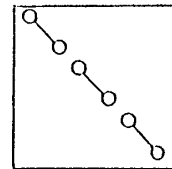


図 30

1 本小さい投げ

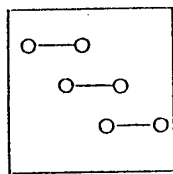


図 31

2 本小さい投げ
(両手持ち)

日 本 (新)

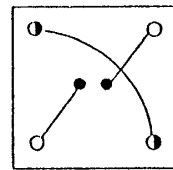


図 32

● 1 本スライド
○ 1 本投げ
● 2 本大きい投げ

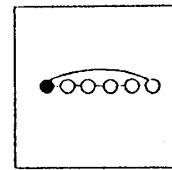


図 33

● 連続大きい投げ
○ 手渡し連続

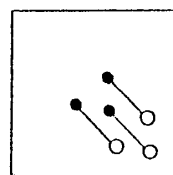


図 34

● スライド
○ 投げ

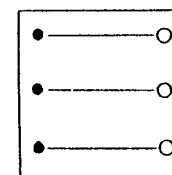


図 35

● 2 本投げ
○ 1 本連続大きい投げ

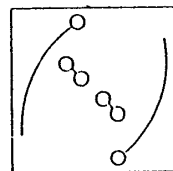


図 36

ジャンプと共に手渡し

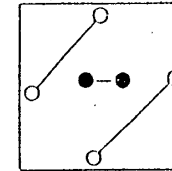


図 37

● 1 本背面投げ
○ 1 本前方大きい投げ

また、交換の投げは全て大きな振りによるものである。新は、DMとして図32の4人の投げとスライド及び2人の2本投げ、図33の1列の連続投げと手渡し、図34の投げとスライド、DSとして図35の1本投げと2本投げの大交換、図36のジャンプの間の手渡し交換、図37の4人

の前方大交換と2人の背面交換の組合せがあり、それぞれの交換が異なり工夫されている。特に図32の複雑交換の連続と図33の横一列の連続交換はオリジナルとしてとることができる。

IV. ま と め

ブルガリアは旧においてこん棒の操作上における多種多様な使い方、および数多い交換を特徴とし、新では、交換数は旧より減少して演技はリズムカルなステップを強調し緩急の変化が見られた。ソ連は、旧においてバレエ的な優雅な動きの中に体操の徒手要素を多く含んでいたが、交換の難易度としてはレベルが低かった。新では、交換のレベルは高くなったが、一人一人の技が多く、脚の動きのみの局所的な運動が目立っていた。日本は、旧において徒手要素の蛇動や振動運動などを多く取り入れ団体の特徴である団体同時性を強調した演技であった。新においては、現代的なリズムの中にオリジナルとしての複雑交換や多種多様な交換を取り入れ、またこん棒に特有な振りの運動を含んでおり、技と動きの調和を見せていた。

このように今回の研究で同年代における他の国との比較及び各国における12年の変遷を見ることが出来た。ルールにおいて演技構成の評価は、徒手と手具との関連、演技内容（手具交換、技術要素、フォーメーションなど）の多様性、緩急の変化及び独創性が重要であるとされ、各国共に十分な研究がなされていたが、今後の課題として、演技の独創性が強調されている中で、新体操の領域からはずれることなく演技構成することが重要であり、日本としては徒手要素のピボットをより深く研究して選手の能力を高めると共に演技の特徴をより強く打ち出すことが必要である。

参 考 文 献

日本体操協会「新体操女子規則」1973年版

日本体操協会「新体操女子規則」1989年版

（平成2年1月受付）